一般社団法人日本生態学会
ニュースレター
No.35
2015年1月

［目 次］

第 12 回男女共同参画学協会連絡会シンポジウムに参加して 1

記事

Ⅰ．学会各賞受賞者決定 4

Ⅱ．代議員の補充 4

Ⅲ．書評依頼図書 4

Ⅳ．寄贈図書 4

Ⅴ．地区会報告 4

お知らせ

1．関東地区生態学関係修士論文発表会 13

書評 14

京都大学生態学研究センターニュース 16

第 12 回男女共同参画学協会連絡会シンポジウムに参加して

別宮有紀子、三宅恵子、岩井紀子、可知直毅

日本生態学会が正式に加盟している男女共同参画学協会連絡会主催の第 12 回男女共同参画学協会連絡会シンポジウムが 10 月 4 日（土）に東京大学駒場キャンパスで開催された。日本生態学会からはキャリア支援専門委員会から 4 人（委員会オブザーバの可知次期会長を含む）が参加した。今回のシンポジウムは「女性研究者・技術者を育む土壌～連携・融合による支援をめざして」というテーマの下、85 の学協会および関係各所から 200 名余の参加者が集い、情報の交換や共有、熱心な議論や交流がおこなわれた。

午前中は、2 つの分科会が開催された。分科会 A では、「女性技術者の働き方－意識・組織・制度－」というテーマで、女性技術者をとりまく現状、問題点、支援策などの紹介があった。分科会 B では「同居支援への支援案の模索」というテーマで、近年増加している研究者カップルの「両住まい問題」を取り上げ、問題の実情や、先進的な支援策の事例、今後必要とされる支援策について紹介・議論がなされた。

午後のポスターセッションでは、26 の学協会と 4 大学・1 研究機関（森林総合研究所）により男女共同参画の取り組みについて発表がなされた。その後の全体会議では、現消費者庁長官・元内閣府男女共同参画局長の坂東久美子氏による特別講演「女性研究者・技術者の一層の活躍に向けて」、およびパネル討論「男女共同参画学協会連絡会の要望書の具現化に向けて」がおこなわれ、女性リーダーおよび女性研究者の育成、研究者のワーク・ライフ・バランスの一層の促進に向けて、問題提起や提言がおこなわれた。以下に詳細を記す。

分科会 A「女性技術者の働き方－意識・組織・制度－」

分科会 A では、女性の坑内労働を禁止する法律の改正についての取り組み、技術者間の交流の試み、そして民間企業 3 社から、現状や取り組みの紹介があった。発表者は 5 名中 4 名が女性であり、技術畑でキャリアを積み、生き抜いてきた自信を感じさせる方ばかりであった。

NEC の女性技術者からは、同期、同僚の現状が紹介された。離職や職種変更を余儀なくされた同僚もいる中で、働き続けることができた理由の一つとして挙げられていたのが、モチベーション 3.0 という言葉であった。これは、怒られるからやる（モチベーション 2.0）よりも、面白いからやる（モチベーション 3.0）方が、より高い成果を示す、というものである。女性に限らず、働く人にとって重要な要素であると感じたが、その後の全体会議でも何度か取り上げられるなど、多くの参加者の印象に残っていた。

中日本建設コンサルタント株式会社からは、業務の多い会社における女性技術者の現状が紹介された。産休育休等の制度は会社に存在しており、事務職であればこれを“権利”として利用し、長く働き続けている一方、技術職は、その職務内容からなかなか利用できず、離職につながることが多いという。その中で、ある優秀な女性技術者の離職を防ぐため、働き方の改善を模索した例を挙げていた。

これらに共通していたのは、企業における時間のやりくりの難しさである。企業では、客先対応や、社内会議、同僚との仕事の割り振りなどで時間の融通が効かず、子育てとの両立を難しくしているようであった。さらに、企業では、女性に要求される能力が男性に対するよりも高いとも感じた。将来の離職率の高さを考慮するため、女性は男性よりも能力が高くないと採用されない実情があるという。また、能力の高い女性技術者であったからこそ、離職を防ぐために対策がとられたが、「普通の」能力の女性は、引き留められただろうか。女性は男性よりも頑張っていないと働き続けられない、というのが厳しい現状なのではないだろうか。

一方で、日立製作所からは、グループ会社全体でワーク・ライフ・バランスを向上させるべく取り組んでおり、徐々に評価されつつあることが紹介された。男性、女性というくくりではなく、ダイバーシティを持つことを目的として進んでおり、前向きな印象を受けた。日本全体の価値観が、このような大企業のリーダーシップによって徐々にでも変化し、女性技術者がモチベーションを持って自らの人生を実現していけるような社会が望まれる。

一般企業の技術職は、理系女性の就職先の選択肢の一つとして、アカデミックなポストよりも多く存在している。技術職の環境の改善は、そのまま理系女性の未来の明るさへとつながるのではないだろうか。会場からも、技術職についてもっと注目すべき、というコメントが成されていた。（岩井紀子）

分科会 B「同居支援への支援案の模索」

女性研究者比率が徐々に増加するに伴い顕在化してきた“Dual career（共働き・研究者カップル）”の問題について、はじめに、昨年度の分科会にて提案がなされたバーチャル大学を含む支援策について、アンケートに寄せられた意見をもとに、ポイントを整理し、解説がなされた。

続いて、“Dual career”の問題への具体的な支援策として岩手大学の取組紹介があり、立地条件などにより女性研究者を採用しても途中退職してしまうことから、両住まい支援制度（単身赴任手当の基礎額相当の月額 23000 円を支給）をおこなったところ、これまでに女性 12 名、男性 25 名が利用し、離職を防ぐ効果があった。その他、配偶者転勤等同伴休業制度（男女とも、職員も利用可）および教員個人調書に介護・育児に従事した期間を記入する欄を設ける取組を進めているとの報告があった。

次に“Dual career”の問題の実情として、3名より話題提供があった。まず、種生物学会員より、出産育児を機に同居を選択した経験をもとに、単年度雇用のポスドクは育休がとれない現状や、育休の取得の可否が機関や上司（PI）の判断によって異なるといった問題点が指摘された。出産育児により同居を希望する場合、所属先を探す際に、科研費をもっているかどうかが大きく影響することや、学術研究員（無給）の身分であっても科研費の研究を継続できる機関もあり、こういった制度の普及も必要との提案があった。また、育児中の研究者への短時間勤務など柔軟な勤務形態を導入して欲しいとの要望があった。

次に、日本森林学会員から、単身赴任をしながら非常勤研究員を経て常勤研究員（任期付き）として研究を続けている現状について、雇用形態の違いによる課題や必要な支援が述べられた。非常勤研究員では着任時のガイダンスが不十分であるため、職場や学会等でメンター（助言者）の充実を図る必要があること、また、育休取得では、非常勤職員の制度などを参考にして機関の担当者の協力を得ながら動くことが大事とのことであった。現在は常勤職で休暇取得や柔軟な勤務が可能となり、家族への負担を少し軽減できるようになったが、交通費は全て自己負担なため、経済的なサポートがあるとありがたい。また、研究プロジェクトによっては、エフォート100％で従事となるため、科研費の申請ができないのが課題。科研費獲得は研究継続のモチベーションになるため、申請資格を保持できるような配慮が必要。周囲から「がんばっているね」といわれるが、「がんばらなくても育児と研究を両立できるサポートが必要」とのことであった。

続いて、本学会員より、ファミリーサポート（地域の子育て支援事業）を活用した単身赴任生活の現状について報告があった。子供の精神的負担が気がかりであり、長期的（2年以上）には両住まいはきびしいこと。宿泊を伴う実習や調査があるためスケジュール調整に苦慮すること、子どもの病気など突発的な事情により調査を断念せざるを得なくなると、データが揃わず研究業績がだせず研究継続が難しくなることなど研究分野ならではの課題が述べられた。支援策として、経済的なサポートとしての両住まい支援の普及（現在、交通費とファミリーサポートの費用は全て自己負担のため）、遠距離での両住まいの場合、移動に時間を要するため家族と過ごす時間を確保するためにも在宅勤務を容認して欲しい、会議に遠隔で参加できるようにITの導入を積極的におこなって欲しいとの要望がなされた。

この他、大学の育児休業制度に関して、研究代表者が休業に入ると研究費全体がストップしてしまう科研費制度や、単年度契約の任期付き研究員が出産とともに離職せざるを得ない現状への問題提起があり、支援策として現行制度の中で導入されている以下が紹介された。

・代替要員の任期（3年）の延長
・テニュアクロックの延長
・育休の分割取得（3分割可能）
・3年の契約期間のいつでも育休がとれる制度（理研）
・実験動物維持のための非常勤職員の雇用（さきがけ研究）
・RPD制度のさらなる拡充
・フランス国立科学研究センターCNRSの制度の紹介（公務員の同居支援を法律で規定。CNRS研究員33000人が国立大学・研究機関に派遣される）

続く質疑応答では、現行の制度の中で工夫できることと国が制度変更すべきことをわけて考える必要があること、シニア（PI）にとっては、介護にも配慮が必要であること（PIが介護でつぶれると研究室全体がつぶれる）、Good practiceを広めていく努力が大切であること、などのコメントがあった。

最後にこの問題への支援策として、以下が提案され、全体を通して「柔軟さ」と「男女両方の問題であるという意識」が大切であるとのまとめがあった。

・RPD制度の発展
・バーチャル大学の創設（受け入れ機関へのインセンテイブの付与も）
・科研費獲得にむけた支援
・両住まい支援

（三宅恵子、可知直毅）

ポスターセッション

日本生態学会における男女共同参画活動についてポスター発表をおこなった。複数の学会から「託児室を開設したいが、どのように運営しているのか」という質問があった。また生態学会独自の取り組みである「ファミリー休憩室」（予約不要・無料）も好評で、「うちの学会でも取り入れたい」という声をいただいた。一方、他の学会では「女性研究者交流のためのランチ会」「男女共同参画ランチョンセミナー」などの取り組みもなされているが、生態学会ではこれまでに実施していない。他の学会では参加者希望者が多く人気があるという。男女共同参画に関する情報共有・意見交換の場として、学会と会員をつなぐチャンネルとして、今後の活動の参考にできればと思った。（別宮有紀子）

全体会議

男女共同参画学協会連絡会は、2012年度の第3回大規模アンケートの結果を反映させた要望書「女性研究者・技術者がポテンシャルを最大限に発揮するために：課題と展望」を、2014年4～8月に65カ所の政府機関に提出した。要望書には（1）女性リーダー育成の促進、（2）研究者のワーク・ライフ・バランス基盤の定着、（3）女性研究者・教員割合の数値目標設定の促進とデータベース化、（4）次世代を担う女性研究者の育成、（5）国際ネットワーク形成の推進支援、の項目が盛り込まれた。これらの要望は、文部科学省の来年度予算や政策方針にある程度反映されてきているが、要望書に掲げられている5つの課題のさらなる実現のために何をすべきか、について4人のパネリストによる話題提供、パネルディスカッションがおこなわれた。その中で、一般的に日本人女性はリーダーになるのをためらう傾向があるが、「女性がリーダーになるためにはどうすれば良いか」という問題提起があった。4人のパネリストはいずれも各界の女

性リーダーとして草分け的な存在で、その言葉には経験に裏打ちされた厚みと重みが感じられた。その幾つかを以下に挙げておく。

・育児期・介護期にはリーダーを引き受けにくい実情を考えると、その時期の労働環境の整備が必要。
・日本人は能力はあるが、おとなしいので自分からは手を挙げない。だからこそ強制的にでもリーダーに充てるべき（ポストは人を育てる）。
・リーダーは、人を上手く使う・動かすことが必要。
・大きなビジョンを示し、人を牽引することが大切。
・学び、汗をかく（自分で動き、ネットワークを築く）ことが必要。
・3 つの目；鳥の目（俯瞰する能力）、虫の目（地に足のついた努力）、魚の目（時流のスピードと方向性を見極める能力）が必要。

どれも我が身を振り返り反省・納得することばかりであった。上記に敢えて付け加えるとすれば、リーダーをやることのメリットをもっとリーダーたちが伝えれば、リーダーになることをためらわない女性が増えるのではないかと思う。リーダーは大変、面倒、辛い、ではなく、リーダーをすることのやり甲斐や魅力をもっと伝えるべきなのではないかと思う。リーダーは確かにしんどい。でもそのしんどい山を登ることで自分も成長し、やり遂げたあかつきには、きっと多くの得るものがあるに違いない。

幸い日本生態学会は女性会員数も多く、各研究分野におけるリーダー的役割であるシンポジウム等の企画者・講演者に占める女性の比率も他の学協会より高い（http://www.esj.ne.jp/careersupport/qr_wmn_2011.pdf）。今後その流れをさらに加速させるためには、若手女性研究者が安定した職を得、家庭と仕事の両立ができるよう、キャリアパス支援や同居支援、育児支援などを国の人材育成の一環として実施していくよう、学協会連絡会を通して国に要求し続けることが大切だろう。

（別宮有紀子）

記　事

Ⅰ．学会各賞受賞者決定

第 13 回日本生態学会賞
　齊藤　隆（北海道大学北方生物圏フィールド科学センター）
第 19 回日本生態学会宮地賞
　小池　伸介（東京農工大学大学院農学研究院）
　高橋　佑磨（東北大学学際科学フロンティア研究所）
　細　将貴（京都大学白眉センター）
第 8 回日本生態学会大島賞
　韓　慶民（森林総合研究所北海道支所）
　山田　俊弘（広島大学大学院総合科学研究科）
第 3 回日本生態学会奨励賞（鈴木賞）
　石川　麻乃（国立遺伝学研究所新分野創造センター）
　門脇　浩明（京都大学大学院人間・環境学研究科）
　末次　健司（京都大学大学院人間・環境学研究科）
　山道　真人（京都大学白眉センター / 生態学研究センター）

Ⅱ．代議員の補充

新東北地区代議員：任期 2015 年 12 月まで
　松木佐和子　＊前回選挙次点者
　（東北地区選出の黒川紘子代議員の所属地区変更に伴う欠員補充）

Ⅲ．書評依頼図書（2014 年 4 月～ 2014 年 11 月）

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当図書を差し上げます。ハガキ又は E メールで、ご所属・氏名・住所・書名を学会事務局（office@mail.esj.ne.jp）までお知らせ下さい。なお、書評は 1 年以内に掲載されるようご準備下さい。

1. 多田満著「センス・オブ・ワンダーへのまなざし　レイチェル・カーソンの感性」（2014）326pp.　東京大学出版会　ISBN:978-4-13-063341-3
2. 大槻久著　岩波科学ライブラリー 226「協力と罰の生物学」（2014）124pp.　岩波書店　ISBN:978-4-00-029626-7
3. ピーター・クレイン著　矢野真千子訳「イチョウ　奇跡の 2 億年史」（2014）440pp.　河出書房新社　ISBN:978-4-309-2530-2
4. 梶光一･土屋俊幸編「野生動物管理システム」（2014）252pp.　東京大学出版会　ISBN:978-4-13-060227-3
5. 石原元著「今西錦司－そのアルピニズムと生態学－」（2014）250pp.　五曜書房　ISBN:978-4-434-19826-7
6. 伊沢紘生著「新世界ザル（上）」（2014）432pp.　東京大学出版会　ISBN:978-4-13-063339-0
7. 伊沢紘生著「新世界ザル（下）」（2014）432pp.　東京大学出版会　ISBN:978-4-13-063340-6
8. 大沢あゆみ著「生物多様性保全の経済学」（2014）380pp.　有斐閣　ISBN:978-4-641-16447-5

Ⅳ．寄贈図書

1. 「海洋地図 No.83（CD）襟裳岬沖海底地質図」（2014）CD　独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター
2. 「うみうし通信 No.84」（2014）12pp.　公益財団法人水産無脊椎動物研究所
3. 「鹿島学術振興財団第 38 回 2013 年度年報」（2014）390pp.　公益財団法人鹿島学術振興財団
4. 「公益財団法人下中記念財団 2014 年報」（2014）84pp.　公益財団法人下中記念財団

Ⅴ．地区会報告

北海道地区会

2013 年度地区会報告（2013 年 4 月 1 日～ 2014 年 3 月 31 日）

（1）2014 年 2 月 7 日に新年度地区会会長選挙と地区会役員信任投票を行った。次期会長は、大原雅（再任）が選出され、役員・会計監査は全員が満票で信任された。

（2）2014 年 2 月 7 日に、北海道若手生態学研究会代表の助成依頼を、役員会で審議の上、承認した。

（3）2013 年度北海道地区会大会を開催した
　日時：2014 年 2 月 21 日（金）午前 10 時から 16 時 35 分
　場所：北海道大学　環境科学院 / 地球環境科学研究院講義室 D201
　参加者：64 名

【若手の部】

「都市化がエゾリスの行動に与える影響：都市部と郊外における逃避行動の違い」内田健太（北大院･環境）･鈴木圭・嶌本樹・濱田瑞穂・柳川久（畜大・野生生物管理学）・小泉逸郎（北大・創成）

「北海道渡島駒ヶ岳におけるシラタマノキの動物種子散布と種子発芽との関係」野村七重･露崎史朗（北大･環境科学院）

「フラッシュ放流が水域から陸域への資源供給量に与える影響」渡辺のぞみ・根岸淳二郎（北大・環境科学院）・中村太士（北大・農学院）

「三江源に生息するチベットアンテロープ（*Pantholops hodgsonii*）の季節移動に対する鉄道の影響とホームレンジについて」仲澤峻（酪農学園大学大学院）・星野仏方・Sumiya Ganzorig（酪農学園大学）

「外来ニジマスの柔軟な生息地利用―性・サイズ特異的な季節移動」金澤友紀代・山﨑千登勢・田中友樹・高屋浩介（北大･環境科学院）･小泉逸郎（北大･創成）

「異なる河床底質におけるカワシンジュガイ属（*Margaritifera*）の生態的機能の解明」髙木優風花・根岸淳二郎（北大・環境科学院）・布川雅典（北大・農学研究院）・久米学（岐阜経済大・地域連携推進センター）・照井慧（東大院・農学生命科学研究科）

「トンボ類を用いた湿地の環境指標の作成～石狩川下流域のトンボ相の多様性変動を通して～」内田葉子（北大理）・宇久村三世・綿路昌史（旭丘高校）

「繁殖初期にみられるシジュウカラのクラッチサイズと性比の関係」乃美大佑（北大･環境科学院）･油田照秋･小泉逸郎（北大・創成）

「雌雄異株植物マムシグサの性決定に関する解剖学的

研究―花芽形成時期に着目して―」飛田千尋（北大理・生物）・大松ちひろ・大原雅（北大院・環境科学）
「The recovery processes after an experimental forest fire: growth of Betula platyphylla var. japonica relative to biomass recovery of Sasa senanensis and soil characteristics」Harisoa Rakotonoely・露崎史朗（北大・環境科学院）
「Indirect plant-plant facilitation: 成木はササ抑制を介して樹木更新を促進する」辰巳晋一（東大・北演）・尾張敏章（東大・北演）
「生育地の分断化が林床性多年生草本オオバナノエンレイソウ個体群に及ぼす影響の定量的評価－異なる生活史段階における遺伝的多様性に着目して－」渡辺崇史・杉木学・大原雅（北大院・環境科学）
「外来アライグマの起源解析および遺伝的集団構造の解明」高屋浩介（北大・環境科学院）・高田雄三（防衛医大・共利研）・小泉逸郎（北大・創成）

【一般の部】
「ワンヘルスのモデル事例となった根釧地方のコウモリに寄生する吸虫類」浅川満彦（酪農学園大・獣医学群）
「タイリクモモンガの巣移動に対する捕食者の影響」鈴木圭（岩大院・連合農学，帯畜大）・澤田石理沙・佐川真由・保田集（帯畜大）・嶌本樹（岩大院・連合農学，帯畜大）・古川竜司（帯畜大）・柳川久（岩大院・連合農学，帯畜大）
「自然破壊は地域の種数を減らさない？」紺野康夫・汐崎正揮・市村里絵（帯広畜産大畜産生命科学部門）
「安平川湿原の水文化学環境からみた保全の方向性」島村崇志・石川靖（道総研環境研）・矢部和夫（札幌市立大）・西川洋子・玉田克巳（道総研環境研）

「若手の部」では 13 件、「一般の部」では 4 件の発表があった。「若手の部」発表者の中から 5 名の審査員による判定の結果、辰巳晋一（東大・北演）、飛田千尋（北大理・生物）、渡辺崇史（北大院・環境科学）の 3 名に賞状および副賞を授与した。

（4）2013 年度（平成 25 年度）北海道地区会総会を開催した。
日時：2014 年 2 月 21 日（金）17 時 15 分から 18 時まで
場所：北海道大学　環境科学院 / 地球環境科学研究院講義室 D201
審議の結果、以下の 3 点が承認された。
1）露崎庶務幹事より庶務報告がなされ承認された。
2）野田会計幹事より会計報告がなされ承認された。
3）その他
生態学会法人化に伴う会計措置の変更点について審議の上了承された。
Joel Cohen 氏（ロックフェラー大）によるセミナーの共催または後援を検討してる旨の報告があった。

東北地区会

（1）東北地区会第 58 回大会を開催
開催日：2013 年 10 月 19・20 日
会場：青森県星と森のロマントピア相馬・白神山地ブナ林（弘前大学試験地）・木村農園（無農薬りんご園）
10 月 19 日（青森県星と森のロマントピア相馬）

【若手口頭発表】
「ミジンコとマイクロスポリディア：寄生者の遺伝子型選好性を探る（研究計画）」八巻圭佑（東北大・理）
「*Daphnia pulex* クローン間のニッチの差異を探る」八巻健有（東北大・理）
「松島湾におけるウミニナ類のメタ個体群動態」西田樹生（東北大・生命）
「水田の大型水生動物に対する津波の影響」鈴木朋代（東北大・生命）
「DNA 分析によるササ類の属間雑種の検証」菅野敬雅・陶山佳久（東北大・農）
「ササの開花遺伝子に関わるエピジェネティック変異の探索」伏見愛雄・陶山佳久（東北大・農）
「モンゴルの草原における構成植物種を対象とした遺伝的多様性調査」高橋昌也（東北大・農）・佐々木雄大（東大・新領域創成科学）・吉原佑・梶原惟央璃（東北大・農）・Nyambayar Dashzeveg・Tserendejid Ayush（モンゴル国立大・理）・陶山佳久（東北大・農）
「在来種と侵入種の耐凍性の種間・集団間の違いについて：研究計画」上林真実（東北大・理）
「ミズナラとミヤマナラの形態的・生態的特徴の違いについて」増井悠人（弘前大・農生）
「ウワミズザクラ当年生実生を加害する病原菌の毒性の親木の成長にともなう変化」巴音达拉・深澤遊・清和研二（東北大・農）
「津波後の海岸林における環境ストレスおよび菌根菌の実生定着に及ぼす影響」鈴木綾・深澤遊・清和研二（東北大・農）
「スギ天然林におけるスギおよび広葉樹実生の更新に及ぼす菌根菌の影響」鈴木愛奈・深澤遊・清和研二（東北・農）
「スギ人工林と広葉樹林との境界からの距離に伴う菌根菌群集の変化」松岡勇希・深澤遊・清和研二（東北・農）
「Janzen-Connell モデルにおける実生の葉の内生菌による病原菌抵抗性の役割」加藤さや・深澤遊・清和研二（東北大・農）
「リンゴの葉における内生菌群集構造と病害抵抗性との関係－葉内部の群集生態学－」平久江歩美・杉山修一（弘前大・農生）
「広葉樹の実生定着に及ぼす菌根菌と病原菌の相対的重要性―光環境と親木からの距離の影響」Wulantuya, Fukasawa Y, Seiwa K（東北大・農）
「環境条件によるブナと土壌の相互作用」橋本桂佑（東北大・理）
「Finding a good spot: Selective root placement upon nitrate in combination with drought stress in *Zea mays*」Tamara Fitters（Radbound Univ / 秋田県大）
「動物による散布と地中貯蔵はミズナラ堅果の生残にどのような影響を及ぼすか」関亮彦（弘前大・農生）
「ウダイカンバにおけるハンノキカミキリの被害防除法の検討」及川誠也・松木佐和子（岩手大・農）
「ケヤキの種子二型について」大山裕貴・清和研二（東北大・農）

「奥入瀬渓流域におけるスギの更新動態」田中大貴・石田清（弘前大・農生）
「八甲田における「あがりこ」ブナの成立要因」名取史晃（弘前大・農生）
「孤立したブナ天然林に隣接するスギ人工林内の広葉樹天然更新の現状 – 地形・管理履歴・光環境の影響 –」福原興・鳥丸猛（弘前大・農生）
「白神山地高倉森調査区における成木群集の動態」土井絵里子・赤田辰治・石田清・鳥丸猛（弘前大・農生）
「東北日本海側低山帯における小流域全域の大径木の毎木調査から判別できた高木種の生育適地」花井滉大・林田光祐（山形大・農）
「日本の山における森林限界の上昇速度とその要因について：30 年前と最近の空中写真による比較」岩井康平（東北大・理）
「山岳氷河アイスコアから得られた樹木花粉の DNA 分析」松木 悠・陶山 佳久（東北大・農）
10 月 20 日（白神山地ブナ林・木村農園）
企画フィールドツアー「紅葉のブナ林と無農薬りんご園を訪ねて」

（2）地区委員会報告

2013 年度定例地区委員会は、2013 年 10 月 19 日に青森県の星と森のロマントピアにおいて開催され、以下の議題について報告および審議がなされた。出席者は以下の 12 名であった。
石田清、占部城太郎、黒川紘子、佐原雄二、鈴木孝男、陶山佳久、清和研二、中静透、蒔田明史、松木佐和子（以上 10 名）、鳥丸猛（活性化 WG）、深澤遊（庶務幹事）

＜報告事項＞

・庶務報告

1）2013 年 1 月 21 日：日本生態学会東北地区会会報 73 号を発行した。
2）2013 年 7 月 20 日：第 58 回地区大会地区大会及び総会の案内を発送した。
3）2013 年 10 月 15 日：第 58 回地区大会のプログラムを電子メールで送付した。
4）2013 年 10 月 19 日：青森県弘前市 星と森のロマントピアにおいて、地区委員会および地区大会を開催した。
5）2013 年 10 月 20 日：白神山地ブナ林（弘前大学試験地）および木村農園（無農薬りんご園）にてフィールドツアーを開催した。

・会計報告

2012 年度決算報告とその会計監査報告、2013 年度の中間報告ならびに今後の執行見込について報告があり、了承された。

・地区会活性化ワーキンググループ

幹事の鳥丸猛氏から、前回に引き続き今回も 10 月開催にした経緯およびフィールドツアーの具体案決定の経緯について説明がなされた。

・岩手生態学ネットワーク

岩手県地区委員の松木佐和子氏から報告がなされ、順調に活動が行われていることの説明がなされた。

＜審議事項＞

・日本生態学会の法人化に伴う地区会会計の新様式について

2014 年 1 月から使用することになる会計報告の新様式について、内容を検討しつつ会計処理について議論がなされた。特に、大会活性化費を学生の旅費に充てる場合、学生から旅費受領の領収書を取るべきとの指摘がなされた。また、会計が学会本部に統一されても、地区会の繰越金は吸収されるわけではなく、継続して利用できることが陶山幹事長から説明された。

・2014 年度予算

2014 年予算案について説明がなされたが、上記の地区活性化の推進と繰越金を長期間にわたり有効利用する手段として、地区大会活性化費に 10 万円を計上することが検討され、その点を修正した上で了承された。

・次回、次次回大会開催地

次回大会を岩手県で開催することが、昨年度の決定事項に基づいて了承された。次々会大会は、宮城県をスキップして秋田県で開催することが承認された。関連して、全国大会を仙台で引き受けること、大会会長を中静透氏、実行委員長を占部城太郎氏が引き受けることが承認された。

・選挙管理委員の推薦

次年度に行われる地区委員会役員選挙の選挙委員として、東北大学の千葉聡氏および牧野渡氏が清和委員長から推薦され、承認された。

・その他

地区会の今後の実施形態について議論がなされ、今回のようなフィールドツアーと前回のようなシンポジウムを適宜交代しながら実施していくことが承認された。また、研究発表における学生発表の比重を大きくし、特に学部 4 年生を対象とした発表賞の提案がなされた。

（3）総会報告

2013 年度東北地区会総会は、2013 年 10 月 19 日に開催され、総会議長に佐原雄二氏を選出し、以下の議題について報告および審議がなされた。

・地区委員会における庶務報告・会計報告が了承された。
・地区会活性化ワーキンググループと岩手生態学ネットワークの活動について、それぞれ報告がなされた。
・日本生態学会の法人化に伴う地区会会計の新様式について、地区委員会での審議内容が紹介され、地区会としての対応が承認された。
・次年度に行われる地区委員会役員選挙の選挙委員として、東北大学の千葉聡氏および牧野渡氏が承認された。
・2014 年度予算案が、微修正の上、承認された。
・次回地区大会を岩手県で開催することが了承された。

関東地区会

2014 年（1 月 -12 月）活動報告

（1）2014 年 1 月 26 日（土）に秋葉原ダイビル・首都大学東京秋葉原サテライトキャンパスにおいて、関東地区会公開シンポジウムを開催した。

テーマ：応用生態学者に問う

主催：日本生態学会関東地区会

企画：森　章（横浜国立大学）、三村真紀子（玉川大学）

生態学と言っても、その対象とする範囲は広い。生態学には、生物学における基礎科学としての側面に加えて、応用科学としての側面がある。人間活動に起因する環境変動が著しい現在においては、実学としての応用生態学のニーズはますます高まると考えられる。一方で、生態学者は、生態学の基礎的な側面を無視して、応用面にだけ取り組むわけではない。応用生態学は基礎科学としての生態学の上に成り立っているものである。今回のシンポジウムにおいては、基礎科学としての生態学を重視しながら、応用生態学に精力的に取り組まれている若手の研究者の方々に、自身の研究紹介となぜ応用生態学なのかについての個人的理由について講演頂いた。どのような経緯を持って生態学を志し、応用生態学に取り組むようになり、どのようなモチベーションで現在何を行っているのか、興味深い講演を頂いた。

【プログラム】

1）赤坂宗光（東京農工大学）「応用研究に取り組む私的理由と今の研究課題：研究を通して実現したいことと保全対象の優先順位付け」

2）小柳和代（早稲田大学）「過去を知ることで分かる未来の生物多様性：草原生植物の個体群分布予測を事例に」

3）亘悠哉（日本森林技術協会）「奄美で応用生態学：保全策と研究の相乗効果」

4）佐々木雄大（東京大学）「湿原生態系における応用生態学；基礎と応用のバランスを意識して」

5）総合討論

（2）2014 年 1 月 26 日（土）に、上記シンポジウムの会場にて役員会および総会を開催した。総会では 2013 年活動報告・会計報告、2014 年予算案・活動計画、地区会則の改正が審議された。

（3）2014 年 3 月 1 日（土）に明治大学駿河台キャンパスにおいて、第 34 回関東地区生態学関係修士論文発表会を開催した。

主催：日本生態学会関東地区会

実行委員：代表：山本将（明治大学）

委員：加我拓巳（早稲田大学）、紺野由佳（茨城大学）、橋本晃生（首都大学東京）、鈴木翔太郎、藤原愛弓、矢萩拓也（東京大学）

【発表一覧】

「ミンククジラ胸鰭基部白斑の基礎的研究及び系群識別への有用性の検討」門脇一郎（東京海洋大学）

「ミンククジラ、クロミンククジラ及びニタリクジラ耳垢栓形成特性の比較分析」玉井希（東京海洋大学）

「沖縄海域におけるザトウクジラ個体群動態分析」鈴木信行（東京海洋大学）

「ツチクジラ年齢査定における凍結ミクロトームを用いた歯牙切片作製の実行可能性評価」石田梢（東京海洋大学）

「超高速船との衝突回避に向けた鯨類忌避音の評価と改良」辻紀海香（東京海洋大学）

「マイクロサテライト分析から見たアカメの遺伝的集団構造」上田修作（東京大学）

「カルエボシ（*Lepas anserifera* L.）の固着日数査定法に関する研究」倉持優希（東京大学）

「安定同位体比分析を用いた流れ藻生態系食物網に関する研究」西田由布子（東京大学）

「発光細菌 *Vibrio campbellii* が持つプロテオロドプシンの生理的役割」中島悠（東京大学）

「スズメにおける営巣密度と孵化率の関係」加藤貴大（立教大学）

「国内の風力発電による渡り鳥（サシバ *Butastur indicus*）の衝突リスク評価」門畑明希子（横浜国立大学）

「ブルガリア中央部におけるイシテン *Martes foina* の食性」久野真純（東京農工大学）

「都市部の公園におけるマスクラットの絶滅リスク評価」神野琢可（横浜国立大学）

「冷温帯落葉広葉樹林の林床におけるオオシラビソ（*Abies mariesii*）稚樹の物質収支」中松美波（早稲田大学）

「マレー半島におけるフタバガキ科樹木 *Shorea acuminata* の異なる開花年での交配様式と花粉散布距離の推定」杉山沙織（筑波大学）

「海洋島における海鳥の営巣の影響：土壌の化学特性を通じた植物の成長への効果」高岡愛（首都大学東京）

「非撹乱対応型の萌芽戦略：安定した森林でのアカガシの生活史段階に応じた萌芽機能の変化」瓜生真也（横浜国立大学）

「隣接したアカマツ林およびコナラ林における水動態・収支の比較」根村真希（早稲田大学）

「佐渡島固有種サドガエルの集団構造と生息適地の推定」山中美優（東京大学）

「孤立した緑地におけるヤマアカガエルの繁殖活動と変態上陸期までの生残過程」志賀優（首都大学東京）

「トゲマダラカゲロウ属幼虫の体色斑変異と河床地質の関係」田村繁明（東京大学）

「ブタクサハムシの寄主範囲拡大のメカニズム」土居勇人（東京農工大学）

「カマキリ類のオスの交尾期の左右非対称性とその特異な交尾行動」鈴木航（首都大学東京）

「ナミヒメクモバチ複合種群（膜翅目・クモバチ科）の種分化解析」久留島宏明（首都大学東京）

「水田のアシナガグモ類の季節動態に及ぼす環境保全型農業の影響とその景観依存性」筒井優（東京大学）

（4）2014 年 3 月 31 日に地区会会報第 62 号を発行した。内容は公開シンポジウム「環境変動下の生物多様性と生態系機能（Biodiversity and ecosystem functioning under environmental change）」および「応用生態学者に問う」の特集、第 33 回関東地区生態学関係修士論文

発表会の報告、および地区会の活動記録・会計報告である。

(5) 2014 年 7 月 25 日（金）に秋葉原ダイビル・首都大学東京秋葉原サテライトキャンパスにおいて、関東地区会公開シンポジウムを開催した。

テーマ：Theoretical approaches for the effective environmental management under uncertainty

主催：日本生態学会関東地区会

企画：横溝裕行（国立環境研究所）・山中武彦（農業環境技術研究所）

環境保全や資源管理を効果的に行うためには、生態系の大きな変化を予測することや、パラメータ・モデル等の不確実性に対処する事が重要である。これまで理論的アプローチにより環境管理に有用な知見が得られてきた。本シンポジウムでは、数理生態学の分野で世界的に著名な Alan Hastings 教授をお招きして、レジームシフトの早期警告シグナルに関する数理モデルについて、大学院レベルの講義形式で講演して頂いた。その後、3 名の日本人研究者による数理・統計モデルを用いた環境保全や資源管理に関してご講演頂いた。本シンポジウムにより、環境管理における理論的研究の有用性と課題について理解を深めるための議論を行った。

【プログラム】

1）横溝裕行（国立環境研究所）「趣旨説明」

2）Alan Hastings（University of California Davis, USA）「Early Warning Signs and Critical Transitions in Ecology: Corals, Theory, Pitfalls, and Advances.」

3）横溝裕行（国立環境研究所）「Decision science for effective management of populations subject to stochasticity and imperfect knowledge.」

4）高科直（九州大学）「Importance of management unit scale in ecosystem management: an example in fisheries.」

5）市野川桃子（中央水産研究所）「Evaluating effectiveness of day closures in the Japanese Pacific chub mackerel purse seine fishery: application of generalized state-space models.」

6）総合討論

(6) 2014 年 9 月 19 日（金）に秋葉原ダイビル・首都大学東京秋葉原サテライトキャンパスにおいて、関東地区会公開シンポジウムを開催した。

テーマ：群集生態学の現在とこれから

主催：日本生態学会関東地区会

企画：森 章、藤井佐織（横浜国立大学）

群集がどのように形成されるのか、そのプロセスの背景にある理論を理解することは、基礎科学としての態学の根源的対象であると同時に、生物多様性の保全や復元における応用科学的側面を担う。本シンポジウムでは、生物多様性の形成プロセスとしての群集集合則についての基調講演をスタンフォード大学の深見理博士にして頂いた。その後に、国内の 3 名の講演者により群集生態学に関わるテーマで話題提供をして頂いた。総合討論では、今後の群集生態学の方向性についての議論を行った。

【プログラム】

1）藤井佐織（横浜国立大学）「趣旨説明」

2）深見理（スタンフォード大学）「群集の履歴効果」

3）饗庭正寛（東北大学）「形質データベース以後の群集生態学」

4）土居秀幸（広島大学）「群集生態学の拡張：生態学を超えて」

5）森　章（横浜国立大学）「生物群集の均質化：群集集合理論に基づく検証」

6）総合討論

中部地区会報告

(1) 今年度新設の研究助成制度について

大学院生等の若手研究者を対象とした研究助成制度を新設し、平成 26 年 3 月 7 日必着で募集したところ、10 件の応募があった。厳正なる審査の結果、以下に示す 3 件の研究課題が採択された。

1）「花の見かけがマルハナバチのトラップライン採餌及び定花性に与える影響」辻本翔平（富山大・院・理工 D2）

2）「チベット高原南東部域における *Meconopsis horridula* の分子系統学的解析」梅本奈美（中部大・院・応用生物 M1）

3）「イボニシ *Thais (Reishia) clavigera* の食性から食物網の安定性を探る」戸祭森彦（筑波大・院・生命環境 M1）

(2) 濃飛横断自動車道路計画の再検討を求める要望書・意見書の提出

リニア中央新幹線の整備計画と連動した濃飛横断自動車道路計画案は、国内最大規模のハナノキ自生地の極めて近傍に道路が計画され、東海丘陵要素の湧水湿地に及ぼす影響が懸念されることから、平成 26 年 6 月 24 日付けで「中津川市岩屋堂の自然を守るための濃飛横断道路計画再考の要望書」を、自然保護専門委員会と中部地区会の連名により、岐阜県知事及び中津川市長に提出した。さらに、中津川都市計画道路の変更について、計画の再検討と影響評価調査の実施に関する意見書を、同年 7 月 23 日付けで岐阜県知事に提出した。

(3) 緊急シンポジウムの開催

平成 26 年 10 月 9 日、岐阜県都市計画審議会が濃飛横断自動車道路の一部区間の決定を見送り、再審査を行う決定が下されたことを受け、同年 11 月 23 日、岐阜市じゅうろくプラザにおいて「里山の価値と存続を考える生態学～濃飛横断自動車道は中津川岩屋堂の里山にどのような影響を及ぼすのか？～」と題する緊急シンポジウムを、自然保護専門委員会と中部地区会の共催により実施した。参加者は 15 名であった。講演題は以下の通りである。

1）「東海地方の植物の特色と東海丘陵要素ハナノキ」広木詔三（愛知大学）

2）「岩屋堂集落の歴史と絶滅危惧種ハナノキ大群生地の成立」菊池賢（森林総合研究所）

3)「手を加えないと失われてしまう自然　–多治見市でのシデコブシの保全活動を例に–」玉木一郎（岐阜県立森林文化アカデミー）

(4) 平成 26 年度（2014 年度）中部地区会大会及び総会を開催

平成 26 年度総会及び中部地区会大会を開催

開催日時：平成 26 年 12 月 6 日 12:00 ～ 17:30

会場：信州大学教育学部長野キャンパス

総会（12:00 ～ 13:00）の出席者及び主な審議事項は次の通りである。

・出席者：井田秀行・須賀丈・佐藤利幸・大塚孝一・堀田昌伸・北野聡・蛭間啓・小南陽亮・浅見崇比呂・山下寿之・石井博・横畑泰志・和田直也（以上 13 名）

・会計監査担当者として山下寿之氏（富山中央植物園）の就任が承認された。

・会計担当の石井博氏より、平成 25 年度会計決算報告・会計監査報告並びに平成 26 年度 11 月 28 日現在までの会計報告があった。

・大学院生や若手研究者等を対象とした研究助成制度案が示され、次年度も実施することが了承された。

・中部地区会費については、次年度も徴収しないことで意見が一致した。

・次回の中部地区会大会について、開催候補地を今後検討することとなった。

・今年で任期を迎える地区会長及び役員について、現会長及び現役員の再任が決まった。

総会終了後、研究発表会（13:00 ～ 17:00）が行われた。参加者は約 70 名であり、3 題の口頭発表と 33 題のポスター発表があった。発表プログラムは以下の通りである。

講演会

1）基調講演「絶滅危惧種ハナノキが直面する新たな危機」菊池賢（森林総研）

2）特別講演「半自然草原の生物と文化」須賀丈（長野保全研）

3）特別講演「地域博物館の役割　～中山間地博物館の実験～」中村千賀（戸隠地化博）

ポスター発表会

1)「消化管内容物分析によるカミツキガメの食性評価」石黒真帆・加藤英明・小南陽亮（静岡大）

2)「異なる森林流域における脱窒量の定量および脱窒発生条件の解析」岩井美咲子・尾坂兼一・伊井裕美・久郷達郎（滋賀県立大）

3)「チベット高原南東部域における *Meconopsis horridula* の分子系統地理学的解析」梅本奈美・森高子・味岡ゆい（中部大）・村上哲生（名古屋女子大）・王君波・朱立平（中国科学院）・松中哲也・西村弥亜（東海大）・南基泰（中部大）

4)「長野県内における常緑広葉樹シラカシの分布と逸出個体群の成長経過」大塚孝一・尾関雅章・堀田昌伸（長野保全研）

5)「岐阜県御嵩町における絶滅危惧種ハナノキの自生地―現状と保全上の課題」篭橋まゆみ・篭橋いずみ（御嵩町オオタカと美しい自然を守る会）・金指あや子（森林総研北海道）・菊池賢（森林総研）

6)「長野県黒姫山麓の湿性地に立地する里山林の植生構造」金子芽衣（信州大）・松田貴子・井浦和子・桜井智子（長野県植物研究会）・井田秀行（信州大）

7)「出光興産（株）愛知製油所におけるカメラトラップ法による中型哺乳類相調査」川本宏和（中部大院）・岡本絵里奈・加藤美の里・柴田あかね・丹羽直美・藤井太一（中部大）・白子智康・上野薫・南基泰（中部大院）・橋本良樹（出光興産愛知製油所）

8)「ホンヤドカリにおける繁殖戦略の可塑的な変化」小玉将史・戸祭森彦・今孝悦（筑波大）

9)「武儀川におけるニシオオヤマカワゲラの生息範囲と水温の関係」小森千晴（岐阜大院）・伊藤健吾・千家正照（岐阜大）

10)「立山地獄谷から噴出される火山ガスがハイマツの針葉に及ぼす影響」佐澤和人・和田直也（富山大）

11)「北北海道の水平的森林限界における 40 年間のシダ植物種構成の変遷軌跡」佐藤利幸・松浦亮介・堀井日香里・吉野文美・田中崇行（信州大）

12)「愛知県知多半島臨海工業地帯企業緑地におけるシャーマントラップによる小型哺乳類捕獲調査」柴田あかね・藤井太一・丹羽直美・岡本絵里奈・加藤美の里（中部大）・川本宏和・白子智康・上野薫・南基泰（中部大院）・貝嶋誠司（JX 日鉱日石エネ知多）・山本明宏（中部電力知多火力発電所）・橋本良樹（出光興産愛知製油所）

13)「多雪地ブナ林において残雪が下層木の展葉フェノロジーに与える影響」山浦 攻・井田秀行（信州大）

14)「疑似一年生草本チゴユリの栄養繁殖特性」壷内巧馬（金沢大院）・笠木哲也（金沢大）

15)「イボニシの食性から食物網の安定性を探る　～餌選好性の変化に着目して～」戸祭森彦（筑波大院）・今孝悦（筑波大）

16)「富山県産イノシシに寄生するブタ肺虫類（*Metastrongylus* spp.）の寄 2007 年～ 2013 年における感染状況の変化」中島豪・池田義和・宮部真吾（富山大）・安田暁・横畑泰志・寺口知子（富山大院）

17)「長野県飯山市鍋倉山麓における民家と里山の関係」仲摩裕加（信州大院）・津田朱紗美・梅干野成央・土本俊和・井田秀行（信州大）

18)「菌栽培昆虫の多様な食糧調達法：西表島のキクイムシは菌を盗み、奪う」西村朋也・梶村恒（名古屋大院）・Hulcr, Jiri（Univ. Florida）

19)「中部山岳地域におけるツリフネソウ属 2 種の花サイズ変異」服部充・長野祐介・篠原義典・山本哲也・市野隆雄（信州大）

20)「UAV を用いた立山地獄谷周辺植生のモニタリング　–火山性ガスが高山植生に及ぼす影響の評価–」樋口開渡・佐澤和人・和田直也（富山大）

21)「高山植物ミヤマキンバイのエコタイプ間にみられる生存率の差異」平尾章（筑波大）

22)「野県飯島町の放置雑木林における管理再開後 4 年間の植生変化」蛭間啓（長野保全研）・石井美久（野口の森里山づくりの会）

23)「愛知県知多半島臨海工業地帯企業緑地に生息する

小型哺乳類の糞中植物残渣からの餌資源推定」藤井太一・丹羽直美・岡本絵里奈・加藤美の里・柴田あかね（中部大）・川本宏和・白子智康・愛知真木子・上野薫・南基泰（中部大院）・貝嶋誠司（JX 日鉱日石エネ知多）・山本明宏（中部電力知多火力発電所）・橋本良樹（出光興産愛知製油所）・藤森誠治（東邦ガス知多緑浜工場）

24）「立山に生育するハイマツの当年枝成長に関するモデリング」藤ノ木雄太・和田直也（富山大）

25）「温暖化による北アルプス中南部のライチョウ生息域への影響評価」堀田昌伸（長野保全研）・津山幾太郎・中尾勝洋（森林総研）・尾関雅章（長野保全研）・比嘉基紀（高知大）・小南祐志・松井哲哉・安田正次・田中信行（森林総研）

26）「ヤエムグラにおける成長戦略と繁殖生態 - 同種内での絡まり合いに着目して - 果」堀井日香里（信州大院）・佐藤利幸（信州大）

27）「山梨県甲府盆地周辺におけるシダ分布を制限する環境要因の推定」（松浦亮介（信州大院）・佐藤利幸（信州大）

28）「春植物カタクリの開花フェノロジーの年変動と気象要因との関係」宮崎貴文・町田有見・浦山亜由美・浦野智裕・和田直也（富山大）

29）「毎木データを活用した里山二次林の構造と生物多様性の学習」村松悠矢（静岡大院）・中村圭佑・小南陽亮（静岡大）

30）「岐阜県飛騨地方の固有種キヨミトリカブト識別のための DNA マーカーと雑種について」安枝美咲・白子智康・南基泰（中部大）・渥美聡孝（九州保健福祉大）・柴田敏郎（基盤研）・門田裕一（国立科学博物館）

31）「福島第一原発事故によるアズマモグラ（*Mogera imaizumii*）への放射性物質の影響（予報 2）」白川貴之・武田沙千愛（富山大）・井出哲哉・横畑泰志・丸茂克美（富山大院）・廣上清一（富山大）

32）「クチナガオオアブラムシ属 2 種における随伴アリ種組成」山本哲也・服部充・市野隆雄（信州大）

33）「本州中部のブナ孤立集団における交配様式の推定（予報）」渡邉真美・井田秀行（信州大）・稲永路子・戸丸信弘（名古屋大院）

ポスター賞に応募のあった25名中、次に示す2名が「優秀ポスター賞」に選ばれ、表彰が行われた。

戸祭森彦（筑波大学大学院生命環境科学研究科）
西村朋也（名古屋大学大学院生命農学研究科）

近畿地区会

（1）2014 年度第 1 回地区会委員会
日時：2014 年 5 月 31 日（土）
会場：I-site なんば（大阪府立大学）
議事：1）2014 年度事業計画案：公募集会の募集、第 2 回地区会例会　2）2013 年度会計報告と 2014 年度会計予算案　3）近畿地区会第 18 回奨励賞の選考　4）京都府亀岡市球技場建設問題に関する要請文の提出について

（2）2014 年度近畿地区会総会
日時：2014 年 5 月 31 日（土）
会場：大阪府立大学中百舌鳥キャンパス
議事：1）2014 年度事業計画案　2）2013 年度会計報告と 2014 年度会計予算案　3）京都府亀岡市球技場建設問題に関する要請文の提出について

（3）2014 年度第 1 回例会
日時：2014 年 5 月 31 日（土）
会場：I-site なんば（大阪府立大学）
第 17 回日本生態学会近畿地区会奨励賞授賞式（岩田知歩氏、小林卓也氏）

公募研究成果発表会
平岩将良・丑丸敦史（神戸大院・人間発達環境）「本土で優占するジェネラリスト送粉者の不在が島の送粉ネットワークに与える影響」

一般発表
1）門脇浩明 1・Claire G Barbera 2・William Godsoe3・Frederic Delsuc 2・Nicolas Mouquet2（1. 京大・人環、2. フランス・モンペリエ第二大、3. ニュージーランド・カンタベリー大）「環境変化における生物の分布予測手法の確立と実験的検証」
2）中臺亮介（京大生態研）・村上正志（千葉大院理）・川北篤（京大生態研）「カエデ属をホストとするハマキホソガ属群集の寄主利用パターン解析」
3）児島庸介・森哲（京都大院・理）「ヤマカガシの母親による毒餌の積極的捕食と毒を用いた子の保護」
4）河合清定・岡田直紀（京都大院・農・森林利用）「ブナ科樹種における葉脈形状，生活型と葉の機能との関連」
5）堀田佳那・石井弘明・黒田慶子（神戸大院・農）「Moving Target―遷移する目標林と自然回復緑化」
6）吉崎雄宏・西田隆義・高倉耕一（滋賀県立大・環境）「ひっつきむしの栄枯盛衰を探る～花粉干渉がセンダングサ属の分布決定に与える影響～」
7）池川雄亮・江副日出夫・難波利幸（大阪府立大学院・理）「生物的防除のパラドックス：複数種の天敵導入は効果的か？」
8）幸田良介（大阪環農水研）・原口岳（京大生態研）「特定外来生物・アライグマの食性把握に向けた試み―安定同位体情報（δ13C, δ15N 値）の活用―」

（4）2014 年度「公募集会」の選考
公募集会の募集を 6 月 13 日－ 7 月 31 日に行い、応募のあった公募集会 3 件について選考委員会による選考の後、近畿地区委員会に選考結果を諮り、8 月 28 日付で公募集会 3 件への助成が承認された。

（5）2014 年度第 2 回地区会委員会・例会（予定）
日時：2014 年 12 月 20 日（土）
会場：I-site なんば（大阪府立大学）
地区会委員会
第 18 回日本生態学会近畿地区会奨励賞授賞式（児島庸介氏、吉崎雄宏氏、池川雄亮氏）
一般発表
1）日下石碧・丑丸敦史（神戸大院・人間発達環境学）「阪神地域の農地管理の違いによる、送粉ネットワークの変化」
2）佐藤安弘（京大・生態研）・工藤洋（京大・生態研）「被

食防御の連合効果がもたらすハクサンハタザオのトリコーム多型の維持」
3）宮嶋彩・和田恵次（奈良女子大院・人間文化・共生自然科学）「タカノケフサイソガニとヒメケフサイソガニにおける鉗脚上毛房の社会的機能」
4）森大喜･太田誠一（京大院農）･石塚成宏（森林総研）･根田遼太（京大院農）・Wicaksono Agus・Heriyanto Joko（MHP）「リン施用は熱帯林のリター分解を抑制するのか？」
5）矢代敏久・松浦健二（京都大院・農・昆虫生態）「シロアリ女王が有性生殖と単為生殖を切り替える仕組み」
6）竹村香里（京工繊大･院）･蒲池浩之（富大･院･理）･久米篤（九大院・農）・田知道（北大院・理）・唐原一郎（富大院・理）・半場祐子（京工繊大・院）「過重力下におけるヒメツリガネゴケの光合成能力と形態変化」
7）前川侑子、町村　尚、松井孝典（阪大工・環境エネルギー工学・地球循環共生工学）「移住カーネル関数によるセアカゴケグモの分布拡大予測」
8）藤原進悟･石田孝信･早坂大亮（近大院農･環境管理学）「キショウブは侵略的な外来種と言えるのか？―奈良県奈良市の放棄ため池蒼池の事例から―」
9）増田圭祐・松井孝典・福井大・町村尚（阪大工・環境エネルギー工学・地球循環共生工学）「機械学習による判別分析を用いた 11 種類のコウモリのエコーロケーションコールによる種判別」
10）片岡寛敬・澤畠拓夫・河内香織（近大農・環境管理学）「人工構造物により生じた連続的で異なる河川生息場における生物多様性」
11）堀内洋平・澤畠拓夫・河内香織（近大農・環境管理学）「GIS と根系の解析から見た奈良県における竹林拡大の現状」
12）古川真莉子 1・高倉耕一 1・本間淳 1・中西康介 2・松山和世 1・日髙直哉 1・沢田裕一 1・西田隆義 1（1 滋賀県大・環境，2 名大・環境）「鳥の採餌効率からヒロヘリアオイラガの衰退をさぐる」
13）山田直季 1･野間直彦 1･高島美登里 2（1 滋賀県立大･環境，2 上関の自然を守る会）「島の植物は平衡状態？～瀬戸内海・上関における移入と絶滅～」

中国四国地区会

（1）第 58 回中国四国地区大会（2014 年 5 月 10, 11 日, 於：岡山理科大学）

【ポスター発表】（5 月 10 日）

「10 年間の観測データにもとづくサクラの開花フェノロジーに関する基礎研究－広島県廿日市市宮島の例－」○坪田博美[1]，久保晴盛[1]，内田慎治[2]，向井美枝子[1]，向井誠二[2]（[1] 広島大・院・理，[2] 広島大・技セ）

「中国における緑化用灌木 *Caragana korshinskii* の初期成長および乾燥耐性に与える種子サイズの影響」○佐井敏[1]，増田達志[2]，原鋭次郎[3]，衣笠利彦[4]（[1] 鳥取大学・院・農，[2] エコスタイルネット，[3] 地球緑化クラブ，[4] 鳥取大学・農）

「モンゴル草原構成種の根の土壌貫入能力」○白川諭，衣笠利彦（鳥取大・農）

「四国山地三嶺山域における斜面崩壊の分布とササ草原衰退との関連性」○福島将太[1]，比嘉基紀[1]，横山俊治[2]，石川愼吾[1]（[1] 高知大・理・生物，[2] 高知大・理・災害）

「コシダとウラジロの地上部生長量」○松田伊代[1]，大野彰洋[1]，内田慎治[2]，向井誠二[2]，黒田有寿茂[3]，豊原源太郎[4]，坪田博美[1]（[1] 広島大・院・理，[2] 広島大・技セ，[3] 兵庫県大・自然研，[4] 元広島大・院・理）

「大気中から捕捉されたコケ植物」○島本俊樹，坪田博美（広島大学・院・理）

「香川県有明浜における海浜植物と環境要因の関係」○戎谷遵，二神良太，岡浩平（広島工業大学・院・工学系研究科）

「市街地がモンゴルの野生草食獣モウコガゼルの生息地選択に及ぼす影響」○坂本有実[1]，伊藤健彦[2]，衣笠利彦[1]，恒川篤史[2]，篠田雅人[2]，Lhagvasuren B[3]（[1] 鳥取大・農，[2] 鳥取大・乾燥地研究センター，[3] モンゴル科学アカデミー）

「サワガニを用いた系統進化学的研究」栗林早紀[1]，○粂川義雅[2]，吉岡憲弘[1]，尾﨑祐未[3]，植本千晴[3]，伊藤桂[1]，三浦 収[4]，手林慎一[1]，荒川 良[1]，福田達哉[1]（[1] 高知大・農，[2] 愛媛連大・院・連合農学，[3] 高知大・院・総合人間自然科学，[4] 高知大・総合研究センター）

【口頭発表】（5 月 11 日）

「GIS と植物社会学的植生図を用いた森林の時系列的変化と生育立地の関係―広島県宮島のアカマツ二次林の例―」○久保晴盛[1]，松田伊代[1]，谷川照樹[2]，内田慎治[3]，向井誠二[3]，黒田有寿茂[4]，豊原源太郎[5]，坪田博美[1]（[1] 広島大・院・理・生物，[2] 愛知県庁，[3] 広島大・技セ，[4] 兵庫県大・自然研，[5] 元広島大・院・理・宮島）

「縮尺 1/25,000 植生図を用いた香川県の植生解析」○森定伸[1]，小川みどり，波田善夫[2]（[1] ㈱ウエスコ，[2] 岡山理科大・生物地球）

「シカ食害地における防鹿柵および埋土種子からの林床植生回復の可能性」高野美波，梶清晋平，比嘉基紀，○石川愼吾（高知大・理・生物）

「ヒノキ人工林における間伐方法がノウサギの利用頻度に及ぼす影響」○佐藤重穂（森林総研・四国）

「湿生絶滅危惧植物の生育に適した湧水湿地の広域分布解析」須藤大智[1]，○比嘉基紀[2]，田辺由紀[3]，前田綾子[3]，石川愼吾[2]（[1] 高知大・院・理，[2] 高知大・理，[3] 牧野植物園）

「鳥取市湖山池の高塩分化と湖岸に生育する植物の現状」高橋法子，○永松大（鳥取大学・地域）

「岡山市北区大野地域におけるナゴヤダルマガエルの保全活動」○貸谷康宏[1]，斉藤光男[1]，河本智宏[1]，伊藤邦夫[2]（[1] 株式会社ウエスコ，[2] 元川崎医科大学附属高校）

「カスミサンショウウオ幼生の成長・発育に与える飼育密度の効果」○久木田沙由理[1]，合田美佳[1]，中村圭司[2]（[1] 岡山理科大・総情・生地，[2] 岡山理科大・生物

地球）
【高校生研究発表】（5 月 10 日）
【公開シンポジウム】（5 月 10 日）
「化石から見る動植物の世界」（コーディネーター：星野卓二・實吉玄貫（岡山理科大学））
「足跡から見る恐竜の行動学」石垣忍（林原自然科学博物館館長）
「隕石衝突による地球規模の環境変化―生物の誕生・絶滅・進化―」西戸裕嗣（岡山理科大学教授）
「中四国の動植物化石」河野重範（三瓶自然館サヒメル学芸員　現栃木県立博物館学芸員）
【総会】（5 月 11 日）
a. 報告事項
庶務報告
学会誌発行部数，地区会員の動向（2013 年 12 月末現在 284 名，昨年度 -18 名），会費納入率，活動報告
会計報告　2012 年度会計
日本生態学会中国四国地区会会長選挙結果報告
日本生態学会中国四国地区会役員体制
地区選出委員（全国委員，自然保護委員）からの報告
アフターケア委員会からの報告
b. 承認事項
2013 年度会計決算
2015 年度合同支部大会開催地：愛媛
c. 審議事項
2014 年度会計予算
2016 年度合同支部大会開催地：鳥取
法人化に伴う会則の制定について
日本生態学会中国四国地区会のあり方について

九州地区会活動報告
（1）2013 年度地区委員会
2013 年 5 月 18 日（土）熊本大学理学部
（2）地区大会
第 58 回三学会九州支部・地区合同大会
会期：2013 年 5 月 18 日（土）～ 19 日（日）
会場：熊本大学理学部
【ポスター発表】
「ナガバノイシモチソウの花と捕虫葉で生じる訪問昆虫をめぐるコンフリクト」田川一希（九大・シス生）
「九州山地のカモシカの生息状況 - 絶滅の危機に瀕する特別天然記念物 - 」○坂田拓司（千原台高）・岩本俊孝（宮崎大教育）・馬場稔（北九州自然史・歴史博物館）
「荒尾市周辺地域におけるカスミサンショウウオについての研究」○瀧下雅幸・○宮本純花・○梶原瑞希・○佐原里桜・高橋翔吾・宮ヶ野直樹・木村南海・中垣優人（熊本県立荒尾高等学校理科部）指導教諭 菊池栄人・小山文子・松浦弘
「九州において絶滅のおそれのあるニホンカモシカを自動撮影カメラで調査する」○安田雅俊・八代田千鶴（森林総研九州）・栗原智昭（MUZINA Press）
「江理海岸潮間帯岩礁に生息する巻き貝類の殻の断熱能力について」○福田誠・浦本達也・大山賢也・田中寿幸（苓洋高校）指導教諭 佐々木静子・藤木寿益枝
「『干潟生物の市民調査』手法による八代海のベントス調査」○森敬介・鈴木孝男・多留聖典・海上智央・柚原剛・桝本輝樹・富田宏・坂田直彦・伊藤詩織・豊西敬・保科圭祐・村松大吾・上野綾子・福井美乃・山本智子・つる祥子・坂井雄志・中川純一・中山邦夫・中山七海・中山頼行・野田美智子・平山信夫・穂田昭徳・溝口隼平・満田隆二・和田太一・佐々木美貴・中川雅博（WIJ 八代海干潟調査隊）
「飛翔時にシロテンハナムグリの体温はどう変化するか」○栗屋大志・藤本仁敏・平野力斗・田邊亮太（東稜高校）指導教諭 田畑清霧
「干潟の底生動物に関する分布調査法の検討：ライン調査法と区画分け調査法」上野綾子（鹿大・水産）
「松元ダムにおけるオオクチバスの簡易駆除方法の検討」江川昂弘（鹿大・水産）
【口頭発表】
「鹿児島県薩摩・大隅半島の照葉樹二次林の植生」○石貫泰三・鈴木英治（鹿大・理工）・木原萌・中原絵理・満琴美・村山奈々美・森園翔梧（鹿大・理）
「霧島大浪池におけるツガ・アカマツ・モミ林の 21 年間の植生遷移」○下西聡一郎・鈴木英治（鹿大・理工）・今村文子・山田俊弘（広大・総合科学）
「熊本県のカモシカ生息地における下層植生の変化 - 1987 年～ 2012 年 - 」坂田拓司（千原台高）・○天野守哉（熊本県文化企画課博物館プロジェクト班）
「大分県で発見されたニホンウサギコウモリ *Plecotus sacrimontis* について」○船越公威（鹿児島国際大・国際文化）・河合久仁子（北大・北方生物圏フィールド科学センター）・原田正史（大阪市大・院・医学研究科）・荒井秋晴（九州歯科大・総合教育学分野）
「センサーカメラを用いた大分大学構内の哺乳類相」○中村彩・永野昌博（大分大・教）
「あずまやはちょっと東向きがいい」○江口和洋（九大院・理・生物）・勝野陽子（ふくおか湿地保全研究会）
「八代海におけるクロツラヘラサギの採餌生態」○高野茂樹（熊本大・自然）・逸見泰久（熊本大・沿岸域センター）
「ハクセンシオマネキの再生した巨大ハサミは，偽のシグナルか？」小島太一（熊本大・自然）・○逸見泰久（熊本大・沿岸域センター）
「有明海におけるハマグリの着底・成長・移動」○橋口真大・山口純平（熊本大・自然）・逸見泰久（熊本大・沿岸域センター）
「ナメクジウオの生活史―天草と島原の比較―」○山口純平・橋口真大（熊本大・自然）・逸見泰久（熊本大・沿岸域センター）
「海底火山（明神海丘）の熱水域・非熱水域における線虫類群集の空間変異」瀬戸口友佳（熊本大・自然）・○嶋永元裕（熊本大・沿岸域センター）
（3）地区例会（生態学会話題提供のみ）
第 508 回　5 月 26 日（日）　沖縄（沖縄県立博物館・美術館［講堂］）沖縄生物学会と共催で実施
「生物学徒が見た沖縄の自然」

◇基調講演：西平守孝（一般財団法人 沖縄美ら島財団参与・東北大学名誉教授）
「この 50 年間どのような視点で生物たちを見て来たか」
◇ 50 年の沖縄の自然と生物学会を振り返る講演：
千木良芳範（元県立博物館・美術館副館長）
「知花夜歩き～ 40 年の記憶から～」
安座間安史（辺土名高校校長）
「ノグチゲラ探索記」
神谷保江（元県立高校教諭）
「私の出会った植物たち」

第 509 回　7 月 13 日（土）　鹿児島（鹿児島大学郡元キャンパス）
主催：鹿児島大学（鹿児島環境学研究会・奄美プロジェクト）
同時開催：三学会（生態学会・動物学会・植物学会の各支部）合同例会
シンポジウム「奄美群島の生物多様性 4―海はつながっているか？―」
プログラム
1. 挨拶：
2. 趣旨説明：種多様性と分布の空間構造～多様性が高いとはどういう状態か？～
鹿児島大学水産学部　山本智子
3. 話題提供：
1）エコトーンと生育環境の多様性が支える奄美群島の海産植物
鹿児島大学水産学部　寺田隆太
2）南西諸島における海岸性動物の生物地理：ヤドカリ類 vs 魚類
琉球大学工学部　河井崇
3）薩南諸島の魚類多様性―これまでの研究成果と今後の課題
鹿児島大学総合研究博物館　本村浩之
4. 報告：鹿児島大学における奄美群島の生物多様性研究
鹿児島大学総合研究博物館　山根正気
5. 総合討論

第 510 回　11 月 9 日（土）　佐賀（佐賀大学農学部）
田中弘毅（鹿児島大学連合農学研究科）
「どのアリに子を託す？　―アリ散布型スゲ属 2 種の種子散布戦略とその適応意義―」

第 511 回　11 月 16 日（土）　熊本（熊本大学大学院自然科学研究棟）
高野茂樹（熊本大・院・自然科学）
「八代海におけるクロツラヘラサギの越冬・採餌生態と保全」

第 512 回　11 月 9 日（土）　宮崎（宮崎大学農学部）
（生態学会からは話題提供はありませんでした）

第 513 回　12 月 7 日（土）　福岡（福岡大学理学部）
澤田浩司（福岡県立福岡高校）
「アオモンイトトンボの雌二型維持機構」

第 514 回　12 月 7 日（土）　鹿児島（鹿児島大学理学部）
（コア SSH 研究会と合同開催）
【特別講演】
阿部美紀子（鹿児島大学大学院理工学研究科）
「マメ科植物と根粒菌～共生の仕組みと窒素固定～」
【高校生による課題研究ポスター発表－鹿児島県高校理科部会推薦】
1）「ヒゲコガネの生態解明に挑む」鹿児島県立国分高等学校　サイエンス部昆虫班
2）「防音壁の研究」池田高等学校　SSH 課題研究物理班
3）「火山灰の降灰の期待値」池田高等学校　SSH 課題研究数学班
4）「火山灰からガラスを作る～ガラスに適した火山灰の模索と火山灰ガラスの応用」鹿児島県立錦江湾高等学校　化学研究部

第 515 回　12 月 14 日（土）　長崎（長崎大学環境科学部）
1）「東部南太平洋のはえ縄漁業における海鳥混獲問題とトリラインと加重枝縄の併用効果の検証」○佐藤成祥（長大院水環 水研セ国際水研）・勝又信博（水研セ国際水研）・横田耕介（水研セ開発セ）・上原崇敬（水研セ開発セ）・伏島一平（水研セ開発セ）・南浩史（水研セ国際水研）
2）「白川河口干潟に優占する埋在性二枚貝 3 種の個体群動態と潜砂行動特性の関係」○竹内清治（長大院水環）・山田文彦（熊大院自然科学）・玉置昭夫（長大院水環）

第 516 回　12 月 21 日（土）　大分（大分大学教育福祉科学部）
1）「溶存酸素量がオオイタサンショウウオの生存と発生速度に及ぼす影響」○山本一成・永野昌博（大分大学院・教育・生態）
2）「大分のタカの渡り」渡会満寿男（NPO 法人希少生物研究会）

（4）地区会報 64、65 号発行

お　知　ら　せ

1. 第 35 回（2015 年）関東地区生態学関係修士論文発表会

毎年恒例の生態学関係修士論文発表会を、下記の通り、横浜国立大学にて開催いたします。この発表会は本年度生態学関係の修士課程・博士前期課程を修了される大学院生の皆さまを対象に、その研究成果を発表する機会を提供するものです。本発表会では日本生態学会関東地区会の会員・非会員に限らず発表でき、毎年さまざまな分野の大学院生が成果を披露しております。また本会は、30 年以上にわたり、幅広い生態学研究の交流や、学生同士の意見交換、ネットワーク作りに役立ってきました。今年度も多くの方々に発表会に参加して頂きたいと考えておりますので、皆様には周囲の大学院生への周知をお願い致します。併せて、当日のご来聴を心よりお待ちしております。

※参加申し込みや会場など詳細につきましては、下記ウ

ェブサイトをご覧ください。
https://esj-kantomaster.github.io

主催：日本生態学会関東地区会
日時：2015 年 2 月 28 日（土） 09:00 ～（発表終了後懇親会を開催）
会場：横浜国立大学環境情報 1 号棟（神奈川県横浜市保土ケ谷区常盤台 79-7）
問い合わせ先：関東地区生態学関係修士論文発表会実行委員会
mail: ecology.kanto.master@gmail.com

2015 年度実行委員
代表：瓜生真也（横浜国大）
委員：石田梢（東京海洋大）、久留島宏明（首都大）、中島悠（東京大学）、山中美優（東京大学）

書　評

林将之著（2014）「樹木の葉」山と溪谷社　760pp. ISBN: 978-4-635-07032-4　定価 4540 円（税別）

これまで写真図鑑の最高峰『樹に咲く花』シリーズなどを送り出してきた山渓ハンディ図鑑の最新刊。平凡社『日本の野生植物』（フィールド版でないほう）のような本格図鑑に比べれば確かにハンディだが、収録種数の多さゆえ、その厚さと重さは（値段も？）半端ではない。副題に「画像検索・実物スキャンで見分ける 1100 種類」とあるように、鮮明な葉のスキャン画像をメインにしたカラー図鑑である。葉に基づく写真図鑑というと、これまでに保育社『検索入門樹木』（尼川大録・長田武正著）があり、信濃毎日新聞社『葉でわかる樹木』（馬場多久男著）がある。これらと比較してみた。

収録種数は、『樹木の葉』が 1100 種で、『検索入門樹木』の約 450 種、『葉でわかる樹木』の 625 種を大きく上回る。写真（『樹木の葉』の場合メインはスキャン画像）の美しさは、白地の上に植物体が配された『樹木の葉』が一番であるが、『葉でわかる樹木』の写真も鮮明さでは遜色ない。この 2 冊の写真が素晴らしすぎるので、『検索入門樹木』の写真が見劣りする感は否めない。検索表の使いやすさは、『検索入門樹木』＞『葉でわかる樹木』＞『樹木の葉』だろうか。収録種数が少ないほど、検索表を作りやすいという理由ももちろんあるが。

『検索入門樹木』の検索表は、不分裂葉のキーに、個体内・個体間変異が大きくて、定量的な記述が難しい葉の形を用いていないのが使いやすい。また、常緑樹の最後のキーで死環（「生葉の 1 点を熱するときに出る黒い輪」）の有無を用いているのがユニークである。評者は（今は）煙草を吸わないので、普段はライターを持ち歩かないが、学生実習や自然観察会で死環を調べるのは教育効果が高いだろう。解説文は、同定のポイントを箇条書きにして示し、繁殖器官などの線画を添えたもので、簡潔ながらもわかりやすい。著者のひとり長田武正は優れた図鑑を多数執筆しており、名人芸の域に達した別格の風格が漂う。評者も学部生のころお世話になったが、初心者には『検索入門樹木』が一番だと思う。従来①②の 2 分冊であったが、最近これらを 1 冊にまとめた〔総合版〕が出版された。

『葉でわかる樹木』の解説もじっくり読めば要を得ているが、字が小さくて 1 行が長いため、ややとっつきにくい。この本の真骨頂は、なんといっても、細脈や毛の様子を示した葉の裏面基部の拡大写真である。この拡大写真を活用するには、実体顕微鏡を使うのがよいだろう。検索表は、不分裂葉では葉の形をキーにしていて、たとえば、「狭長楕円形」・「倒卵状長楕円形」・「楕円形」を区別しなくてはならないのが、やっかいである。また、検索表の最後に示される種群の写真がとびとびのページに載っていることがあるのが使いにくい。

『樹木の葉』の解説は、形態・分布などの概説の下に【見分け方】の項目があるほか、花実のついたシュートや幹などの生態写真が添えられ、スキャン画像にも書き込みがあり、時に拡大写真も示されている。『検索入門樹木』とは対照的に、詳細であるがゆえにわかりやすい。ただ、情報量が多すぎて初心者は使いづらいかもしれない。検索表には、単鋸歯か重鋸歯かというキーはなく、たとえば、「低木・小高木・高木／不分裂葉・互生・鋸歯縁・落葉樹／中型の葉／卵型・楕円形・倒卵形」というグループでは、2 ページにわたって示された 62 種の葉の写真から 1 種に絞り込んでいかなくてはならない。収録種数が多いこともあり、初心者が種同定に使うのは難しいかもしれない。

以上のように、『樹木の葉』・『検索入門樹木』・『葉でわかる樹木』の 3 冊は同じように葉の拡大写真（またはスキャン画像）を用いながら、それぞれ個性があり、甲乙つけがたい。本稿は『樹木の葉』の書評なので、言い換えれば、『樹木の葉』は『検索入門樹木』・『葉でわかる樹木』に匹敵する好著である。「大は小を兼ねる」ということで、収録種数の多さで選ぶなら、本書『樹木の葉』を採ることになる。日本に自生しないが公園樹・街路樹として植栽されている樹種も多数収録されているので、たとえば、大学構内に植栽されている樹木などを調べるのにも便利だろう。

（鹿児島大学理学部地球環境学科　相場慎一郎）

アンドリュー・F・デロシェール著、坪田敏男・山中淳史監訳（2014）「ホッキョクグマ」東京大学出版会 280pp. ISBN978-4-13-060226-6 C3045 定価 9600 円（税別）

「オーロラの瞬く凍った海の上を渉猟する、巨大で危険を秘めた純白の捕食者」ホッキョクグマについて書かれた一般向けの図書。著者は、約 30 年にわたる調査歴を持ち、ホッキョクグマと北極圏のことを熟知し、また、それらを愛するカナダ、アルバータ大学の研究者である。本書 17 ページには、痲酔されたホッキョクグマの側で笑みを浮かべる著者の写真が掲載されている。ホッキョクグマは、時に 800 kg にもなる大型の肉食獣であるが、

著者もたいへんな大男なので、この写真からクマの大きさが十分伝わらないのが残念である。

本書では、最新の研究も交えてホッキョクグマの生物学的な特徴について詳しく、時にはユーモアを交えてわかりやすく書かれている。ホッキョクグマの形態、感覚、生理、行動、個体群、生息地、分布、進化、系統、人との関わりなど階層の異なる生物現象をうまく紡ぎながらホッキョクグマの全体像が描き出されている。生態と行動の完全ガイドという副題に偽りはない。また、巻末には、参考文献として関連の学術論文があげられており、研究者にもたいへん役に立つ。さらに、著名な動物写真家ワイン・リンチの手によるすばらしい写真が満載である。もちろんホッキョクグマの写真が一番多いのだが、目眩く変化する海氷と空の表情、多様な生物など北極圏の自然が独創的なアングルで切り取られている。私が好きな写真は、103 ページのものだ。真っ白な氷原に、海氷を血で染めながらアザラシを貪り食うホッキョクグマの姿がぽつんとある。北極圏の氷の世界は、一見無機的で冷やかなようだが、実は赤い血も流れる生物多様性に富んだ世界であること、その中で、ホッキョクグマが孤高のトッププリデータとして君臨していることを象徴しているように思う。地球温暖化で絶滅の危機に瀕している生き物のはかなさも表われているような気もする。

Ursus maritimus（海のクマ）という学名が示すようにホッキョクグマは、北極の海洋生態系に適応し、その頂点に位置する捕食者である。アザラシ食に特化しており、アザラシを効率よく、十分量捕獲できるかどうかが、その生存と関わっている。本書では、このことと北極圏という極限の環境への適応について、ホッキョクグマの身体の大きさ、被毛など身体の構造、食性を含めた行動から詳細に解説されている。極限の環境で十分な食物を確保するために彼らは広い行動圏を持ち、その面積は、200 ～ 96 万 km^2 にもなるという。彼らは海氷の上でもっぱら行動するが、移動には海氷の状態が大きく影響している。彼らが薄い氷の上を渡るときの姿はたいへんユーモラスで、ヒトデのように 4 つの足を広げ、体重を分散させてそろりそろりと移動する（p66 の写真）。また、泳ぎが得意で、ある個体は 9 日以上かけて 687 km も連続で泳いで移動したことが衛星追跡で明らかになっている。一方、陸路を長旅する場合もあり、ロシア東部のチュコト半島をベーリング海からチュクチ海まで越える個体や、スバールバル諸を北グリーンランド海からバレンツ海まで超える個体もめずらしくないそうだ。そのため標高 800 m の地点に出現した例もあるという。このように長距離を移動した末にもとの場所に回帰してくるナビゲーションの能力は脅威としかいいようがない。

忘れてならないのは、著者が最後に強調しているように、その生存には地球温暖化が深刻な影響を与えていることだ。気候変動に関する政府間パネル（IPCC）の第 5 次評価報告書によると、20 世紀末と比べると 21 世紀末の地球の平均気温は、温室効果ガスの大幅な削減を行った場合は約 0.3 ～ 1.7℃、温室効果ガスの高い排出が続いた場合は約 2.6 ～ 4.8℃上昇すると予測されている。後者の場合、今世紀中頃までに夏になると北極海の氷が完全に融けてしまう可能性が高いそうだ。地球温暖化は地球環境に様々な影響を与えているが、北極圏の生態系への影響は大きい。当然、そこに生活するトッププリデータ、ホッキョクグマへの影響も大きい。本書では、現状においても、海氷の融ける時期が早まるとともに、海氷の形成が遅くなって、アザラシ狩りが可能な時期が短くなっていることが指摘されている。また、クマの繁殖行動への影響もあるという。そして、著者は訴えている、政府のリーダシップ、産業界のコンプライアンスとともに、私たち一人一人が自分たちのカーボンフットプリントを減らそうという意識と努力をしなければ、このすばらしい生き物を救うことはできない、と。

（大井徹　森林総合研究所）

京都大学生態学研究センターニュース
Center for Ecological Research NEWS

京都大学
生態学研究センター
Center for Ecological Research
Kyoto University

京都大学生態学研究センター
〒 520-2113 滋賀県大津市平野 2 丁目 509-3
Tel : (077) 549-8200（代表），Fax : (077) 549-8201
センター長　中野伸一

Center for Ecological Research, Kyoto University
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,
520-2113, Japan
Home page : http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp

協力研究員 (Affiliated Scientist）に関するお知らせとお願い

生態学研究センターでは全国共同利用研究施設として、開かれた研究活動を活発化するために、協力研究員制度を設けています。協力研究員は担当教員とご相談のうえ、施設の一部をセンター員に準じて利用できます。平成 27 年 3 月末で任期満了の協力研究員におかれましては、これまでのご協力に対して厚く御礼申しあげます。改めて平成 27・28 年度の協力研究員を募集いたします。新規及び引き続き協力研究員としてセンターの共同利用を希望される場合は平成 27 年 2 月 27 日（金）までに申請書をご提出いただくようお願いいたします。

申請書の様式はセンター HP（http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp/ecology/cooperative/cooperative-reserchers.html）からダウンロードできますので、必要事項を入力のうえ電子メールでお送りください。なお、上記締切以後の申請についても随時受け付けています。

※京都大学生態学研究センター協力研究員の委嘱についての申し合わせ

1. 生態学研究センター（以下「センター」という）の研究活動を推進するため、学内外の研究者に協力研究員を委嘱することができる。
2. 協力研究員は、教授会の議に基づき、センター長が委嘱する。
3. 協力研究員の任期は原則として 2 年とする。

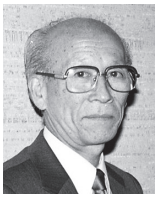
【申請書の提出先・問い合わせ先】

京都大学生態学研究センター共同利用担当
〒 520-2113 滋賀県大津市平野 2 丁目 509-3
E-mail: kyodo-riyo@ecology.kyoto-u.ac.jp
Tel: 077-549-8200 / Fax: 077-549-8201

センター関係者の動き

1）奥田 昇准教授が、10 月 1 日付けで総合地球環境学研究所へ転出しました。
2）陀安一郎准教授が 12 月 1 日付けで総合地球環境学研究所へ転出しました。

訃報



生態学研究センターの母体の一つである京都大学理学部附属植物生態研究施設で長く教授を勤められた黒岩澄雄名誉教授が、平成26年10月6日（月）に肺炎にてご逝去されました。享年88歳。8日（水）に奥様の志津枝様を喪主とし、親族のみで告別式が行われました。先生は、昭和28年3月東京都立大学（現、首都大学東京）理学部を卒業、同35年3月東京大学大学院生物系研究科博士課程を修了されました。昭和36年10月東京大学理学部助手を経て、同40年4月京都大学理学部附属植物生態研究施設助教授、同48年10月同施設教授に昇任、同50年4月より京都大学理学部附属植物生態研究施設長（任期2年）に通算4期就任されました。平成2年3月京都大学を停年退職し、京都大学名誉教授の称号を授与されました。

翌平成3年4月から、改組により植物生態研究施設が廃止、同時に京都大学生態学研究センターが発足しました。昭和55年日本生態学会総会での「生態学研究所設立について決意表明」以来、当生態学研究センター設立に大きく貢献されました。また研究面においては、Monsi & Saeki（1953）の群落光合成モデルを最も良く理解し、草本群落から縞枯山（長野県）の針葉樹林などを対象とし、その学問分野の発展に大きく貢献された方の一人と存じます。ここに謹んで哀悼の意を表します。

◆会費
会費は前納制で、学会の会計年度は 1 月から 12 月までです。
新年度の会費は 12 月に請求をします。会費未納者に対しては 6 月、9 月に再請求します。
下記会費および地区会費の合計を次の口座にお振込ください。

郵便振替口座番号 01070-6-19256　口座名：一般社団法人日本生態学会

退会する際は前年 12 月末までに退会届を事務局まで提出してください（ウェブサイトに申込フォーム有り）。
会費を 1 年分滞納した会員には会誌の発送を停止し、2 年分滞納した時は自動的に退会処分となります。

会員の区分と個人会員の権利・会費

会員種別	年会費 * （保全誌購読者 **）	大会発表	総会・委員 （選挙・被選挙権）
正会員（一般）	11000 円 （13000 円）	○	○
正会員（学生）	8000 円 （10000 円）	○	○
賛助会員	22000 円	×	×

*生態学会では収入の少ない若手一般会員のために、学会費･大会参加費を学生会員と同額にする措置を実施します。
詳細はウェブサイトをご覧下さい。
**非会員の方の保全誌定期購読料は年額 5000 円です。
なお、保全誌は発行後 2 年間、オンラインアクセスができません

【論文投稿の権利】
・日本生態学会誌　　正会員のみ有
・保全生態学研究　　正会員・保全誌定期購読者のみ有
・Ecological Research　　投稿権利は会員に限定されません

【冊子を必要としない（オンラインアクセスのみの）会員への割引】
・日本生態学会誌　　600 円
・Ecological Research　　900 円
既会員の方が今後申請される場合は、割引を受けたい年の前年 10 月末までに問い合わせページを通じて事務局へご連絡ください。
新たに入会される方は入会時に申請があれば入会年より適用されます。

地区会費
正会員は、住所（所属機関か自宅のうち、郵送物の配布先となっているほう）により、地区会に参加することになっています。各地区会ではそれぞれ独自に地区会費を定めています。学会費の納入時には、これらも含めて請求しますので、あらかじめご了承ください。

・北海道地区（200 円）：北海道
・東北地区（600 円）：青森県・岩手県・宮城県・秋田県・山形県・福島県
・関東地区（400 円*）：茨城県・栃木県・群馬県・埼玉県・千葉県・東京都・神奈川県・山梨県
・中部地区（0 円）：長野県・新潟県・富山県・石川県・福井県・岐阜県・静岡県・愛知県・三重県
・近畿地区（400 円）：滋賀県・京都府・大阪府・兵庫県・奈良県・和歌山県
・中・四国地区（400 円）：鳥取県・島根県・岡山県・広島県・山口県・徳島県・香川県・愛媛県・高知県
・九州地区（700 円）：福岡県・佐賀県・長崎県・熊本県・大分県・宮崎県・鹿児島県・沖縄県
*ただし当面は徴収しない

問い合わせ先：日本生態学会事務局
〒 603-8148　京都市北区小山西花池町 1-8
Tel&Fax 075-384-0250　　http://www.esj.ne.jp/
※お問い合わせはウェブサイトからお願い致します。